

熊本の漱石

―漱石が第五高等学校で行った人事―

要旨

漱石の熊本での四年三ヶ月を考えると、第五高等学校での英語教師としての生活を抜きにしては考えられない。漱石は五高で教師として教壇に立つだけではなく、初めて学校行事に参加し、英語科主任として、また後には教頭心得として学校行政にも関わった。漱石の学校行政家としての手腕を評価する研究者もいるが、本稿では特に、その人事面に着目して考察した。詳細に見ていくと漱石が行った人事は、決して漱石一人で行ったものではないことが分かる。また漱石が、いかに生徒を教育できる教師を招聘するかということに心をくだいたかが見えてくる。それは漱石が学生時代に書いた「中学改良策」にもつながるものであった。

キーワード

夏目漱石、第五高等学校、熊本

一、はじめに

漱石が、五〇年間の人生の中で生まれ故郷・東京を離れたのは、

村田 由美*

明治二八年（一八九五）四月から三六年一月までのおよそ七年九ヶ月である。生粋の江戸っ子であった漱石にとって、松山、熊本、倫敦での異文化との出逢いが、作家漱石誕生の大きな要因のひとつとなったことは間違いない。その中でも、熊本での四年三ヶ月は、もつとも長い。しかもそれは英語教師としての職務を全うした四年三ヶ月である。

漱石の教師としての生活はおよそ一二年に及ぶ。初めて教職に就くのは、明治一九年九月ごろのことである。第一高等中学校予科在学中、自活を決意して友人の柴野（中村）是公と、江東義塾でおおよそ一年間、午後二時間英語で地理や幾何を教えたという。その後、二五年五月、帝国大学文科大学英语科三年の時に東京専門学校の英語講師となり週二回（後三回）出講。二六年には高等師範学校の英語嘱託として週二回出講し、二校とも二八年三月まで続けた。いずれも非常勤であり、英語の授業のみの担当であった。

明治二八年四月、菅虎雄の斡旋によって赴任した愛媛県尋常中学校では、「八時出の二時退出」（明二六・五・二六付正岡子規宛

*崇城大学非常勤講師

書簡)で担任等もない。同僚と話すこともほとんどなく俳句集を手放さなかったという。同年一〇月に起きた生徒の住田昇校長排斥ストライキに不快感を強くし、一月六日付子規宛書簡では、松山での不満を伝えている。二八年八月、熊本の第五高等学校に赴任していた菅虎雄にも松山の不満をしばしば伝えたという(菅虎雄「夏目君の書簡」『漱石全集』別巻)。漱石は再び菅の斡旋で五高に赴任したのである。

周知の通り漱石は熊本から英国に留学し、帰朝後は熊本に帰ることはなかった。明治三六年四月から帝国大学文科大学・第一高等学校で、三七年九月からは明治大学予科でも教職に就くが、いずれも講師である。つまり、漱石は熊本においてのみ、初めて教師として学校行事に参加し、教務、人事など学校行政にも関わった。それは、漱石が望んだ生活ではなかった。東京に適当な職があれば帰ろうと構えていた。しかし、やがて漱石は、子規や鏡子夫人の父・中根重一の就職斡旋も断つて熊本に腰を据えることになる。「教育者夏目金之助」がここに誕生したのだ。熊本時代の漱石は、この「教育者」としての視点なくして語ることはできない。

漱石が、熊本にやって来たのは二九年四月一三日のことである。熊本での生活が四年以上になることなど、当時の漱石は想像もしていなかっただろう。しばしば引用される、明治三〇年四月一六日付、同四月二三日付正岡子規宛書簡によって、漱石が五高の教師として腰を据えていく様子が推察できる。漱石は、五高の中川元校長が熱心に漱石を引き止めたため、その信頼に応える決意をしたのだという。ちょうど友人・山川信次郎を五高の英語教師として四月に赴任させたばかりでもあった。その山川に対する信義においても自分だけ東京へ帰るわけにはいかなかった。

むろん「教師をやめて単に文学的の生活を送りたきなり」(明三〇・四・二三付正岡子規宛書簡)というのが、漱石の本心であったとしても、「目下たとい仮令如何なるよき口ありとも自ら進んで求むる意なく」と、同じ教師をするのなら「現在の地位にて少し成績を現はし」(同前)たあとで動きたいと述べるのだ。

漱石は、英語教育のうえでも、また新派俳句の俳人としても熊本に大きな足跡を残した。それらを明らかにすることが、私の研究テーマのひとつである。本論文ではその中でも、漱石が五高で関わった人事について考察したい。

二、漱石書簡に見る人事

熊本時代の漱石を語るとき、漱石がいかにも人事好きであったかのように述べる人がいる。小宮豊隆は、『夏目漱石 二』(岩波新書 昭三三・九)の中で漱石が五高時代「英語の教師として立破な成績を挙げたのみならず、行政面でも随分五高の為に働いている」と書いている。江藤淳もまた、漱石が「教職に魅力を感じていなかったことは明らかであるが、その反面彼に学校行政家の潜在的能力がそなわっていたことも否定しがたい」(『漱石とその時代 第一部』新潮社 昭四五・八)と述べた。たしかに、松山時代と比べれば、その働きぶりは見違えるほどだ。

当時の五高校長は中川元である。前任の第四高等学校校長時代、「生徒による学力不足教師排斥運動」が起こった際、「石川県人九名、他県人三名を非職とする荒技を断行した」(『夏目漱石 周辺人物事典』笠間書院 平二六・七)という。中川校長の孫である中川浩一は「熊本時代の漱石 新考」(『講座 夏目漱石』第一巻 有斐閣 昭五六・七)で、校長が明治二六年一月から三三年

四月（約七年二ヶ月）の熊本在任期間、「百十七人の教職員を着任させる一方、七十八人の辞職」をとりしきり、「漱石は校長派の有力分子として、はたまた非学士追出しの策士にとらまれて、同僚の恨みを買ったものと考えざるをえない。そのことが、『熊本は思ひ出しても嫌』との感情の一因」と推測している。果たしてそうであろうか。

まず、「七十八人の辞職」と聞くと相当の人を辞職に追いやったように見えるが、中川の後には校長になつた桜井房記においては、明治三三年四月から四〇年一月（約六年九ヶ月）の間に七五人の着任、一〇二人の辞職を確認することができるので、中川が特に多かったわけではない。中川浩一が指摘するような「非学士追出しにとらまれ」るような事実があるのだろうか。

現存する漱石書簡を、熊本滞在中の明治二九年四月一三日から三三年七月に限定して見てみると、全一〇九通（二九年二七通、三〇年二八通、三一年一七通、三二年三〇通、三三年七通）のうち、人事に関する書簡（五高または他校への教師の斡旋、照会などの言及があるもの）が二六通（二九年二通、三〇年一四通、三一年三通、三二年七通）、その他に野々口勝太郎の就職依頼に関する書簡が四通、学生の入学に関する依頼が二通、学生の生活援助に関する願いや紹介が四通である。

こうしてみると、人事に関する書簡が多いことがわかる。三一年は他の年に比べて書簡が少ないが、「鏡子夫人の白川入水事件^{（注1）}」があつた年で、書簡には、鏡子夫人のための欠勤願いも残されており、書簡の少なさは、身辺の心配事の多さを推測させる。漱石が関わった人事について、この書簡と五高記念館に残っている資料で確認してみる。まず、書簡について、前述の人事に関する書簡で五高関係に限って抽出すると次のようになっている。

氏名は、五高に赴任・辞任、あるいは問い合わせで名前の挙がっている人。番号は『漱石全集』第二十一巻の書簡番号による。

明治二九年

なし

明治三〇年

① 山川信次郎 一一八・一一九

② 赤木通弘 一二四・一二五・一二七・一二八・一三一・一

三六

③ 水戸校森 一三二

④ 「放逐を建議する」教師 一三八・一四〇

⑤ 奥太一郎 一三八

⑥ 狩野亨吉 一三六・一三九・一四〇

明治三一年

⑦ 奥太一郎 一四七・一四八・一四九

明治三二年

⑧ 松本源太郎 一六七

⑨ 山川信次郎 一七一・一七二・一七三・一七四

⑩ 茨木清次郎 一七四・一七五

⑪ 土井晩翠 一七四

⑫ 遠山参良 一七五

⑬ 平山久太郎 一七九

このうち、「水戸校森氏」は、「都合によりては又々御相談可致存候」と述べ、立花銑三郎に仲介を依頼しながら、五高に招聘するには至らなかった人物である。書簡一六七については、注がついていないが「松本氏愈当校の方に決定のよし」とあるのは、三月三十一付で五高教頭として赴任した松本源太郎のことである。漱石が、その赴任の労を執ったと思われる狩野亨吉に「御配慮有

がたく奉謝候」と礼を述べているもので、漱石が直接人事に関わったかどうかはわからない。茨木清次郎は、狩野亨吉の紹介で山川信次郎の後任候補としてあげられた人。土井晩翠については、同じく山川の後任として漱石と山川二人で最適任者として名を挙げたものの、「未だ先方へは懸合はず多分拒絶するならんと存候」との見解を書簡で示している。平山久太郎は、漱石が明治三〇年一月佐賀・福岡の尋常中学校に授業参観に行った際、佐賀県尋常中学校で参観した教師の一人である。「此師ノ教授受ケバ少ナクトモ此諸科ニ対スル知識ハ高等学校入学試験ニ応ズルニ充分ナラン」(五高資料「佐賀福岡尋常中学校参観報告書」と、その教授法について高く評価していた人物である。狩野の五高在任中、五高教師として推薦したものの、五高赴任は実現しなかった。その平山を東京近辺の尋常中学校へ斡旋してほしいと、狩野に依頼している。

つまり、書簡からわかるのは、漱石が人事に関わるようになったのが明治三〇年からで、明らかに人事に関わったことが確認できるのは、山川信次郎の招聘と転校、赤木通弘の招聘と辞任、狩野亨吉の招聘、「放逐」した教師、その後任として選ばれた奥太郎、山川の後任の遠山参良ということになる。しかし、書簡はすべてが残っているわけではない。このほかにはないのか、今一度五高資料も含めて考えてみる。

三、浅井栄熙・荻村錦太・山川信次郎

漱石が熊本に赴任した明治二九年(一八九六)当時、五高で英語を担当していたのは、英語主任の佐久間信恭、浅井栄熙、大浦肇、荻村錦太、中川久知(博物)、賀来熊次郎(ドイツ語、地

学・史学を兼ねる)、杉山岩三郎(数学・力学を兼ねる)、篠本二郎(地学・鉱学を兼ねる)、と外国人教師フアーデルであることが荒正人『増補改訂 漱石研究年表』(集英社 昭五九・六)に記されている。これは『五高五十年史』をもとに書かれたものと思われる。

残念ながら明治二九年度の資料はないが、「雑件」という五高資料の中に教師の受け持ち時間数を示した書類があり、明治三〇年、三一年の英語担当の教師の時間数を確認できる。^(注2)それによると三〇年以降、杉山や、中川、賀来が英語を担当することはなかった。他教科と兼ねて英語を教えているのは、経済通論を兼ねていた枝光寅太郎(ただし、三二年一月非職を命じられている)、鉱学を兼ねた篠本二郎と、明治二九年九月採用で論理学担当の黒木千尋(二九年九月から三〇年九月まで一年勤務)、この黒木の後任として採用された赤木通弘だけである。二八年の「命令簿」では浅井栄熙、大浦肇、荻村錦太らの受け持ち時間が確認できる。三〇年の受け持ち時間数から推測するに、二九年も三〇年とほぼ変わらない体制ではなかったかと思われる。つまり、中川、賀来、杉山は漱石赴任時、英語を教えていなかった可能性が高い。

英語はほとんど専門の教師が教えるようになっていた。それは当然、中川元校長の考えでもあったはずで、菅虎雄が、校長の意を受けて漱石を五高に推薦したのもその手始めだったのだろう。中川校長が「英語を盛んに」という強い意欲を持っていたことは、英語科の主任であった佐久間が五高の演説会で「英語会」の結成を呼びかけていることから窺える(『龍南会雑誌』四七号 明二九・六)。「五高五十年史」の「任命職員一覧表」から推測すると、漱石は、明治二八年四月から二九年四月まで担当していた田

中勘三郎^(注3)の後任と思われる。漱石は、帝国大学文科大学英文学科の二回生であり、二人目の卒業生である。新進気鋭の英文学科卒の漱石に対する期待は大きかったはずだ。中川校長に「非学士」を排除しようという意図はあったかもしれない。しかし、中川校長が更迭した職員をすべて検証することはなかなか難しい。辞任した教師の中には、帝大卒の教師も含まれており、必ずしも学歴偏重というわけではない気がする。

漱石赴任後に辞職した英語教師に浅井栄熙がいる。安政六年（一八五九）一〇月熊本生まれで、中村敬宇の同人社に学び、福井県で教職に就いたが、病のため帰郷。熊本で英語塾を開き、熊本英学会主幹となるなど、熊本の英学における先駆的な人物であった。明治二八年六月に就任し、一週二〇時間担当している。浅井は、鏡子夫人が白川で入水事件を起こした際、新聞に取り上げられないように奔走したと言われるが、三〇年三月に「座骨神経痛」を理由に辞職している。五高資料には、自筆の退職願が残っているが、浅井の遺族は浅井が「学士」でなかったため辞職させられたと捉えていたらしい（前掲「熊本時代の漱石 新考」）。しかし五高資料「職員出欠調」^(注4)を見ると、二月、三月と出勤日の半分以上の欠席が記されており、現存の資料の通り健康上の理由が、真実だったのではないか。浅井の辞職に漱石が関与していなかったのは明らかで、三一年九月三日付菅虎雄宛書簡で「浅井氏には時々面会御尊致居候」と、その交友が続いていることがわかる。明治四二年九月の満韓旅行の際にも京城の三等郵便局長であった浅井を訪ねている。

二九年七月に辞職した荻村錦太がいるが、一年の勤務であった。東京英学会卒とあり、二八年に文部省第八回検定試験及第によって教師となった人で、中川校長の首切りを疑いたくなるが、自筆

の辞職願^(注5)が出ており、「学士」ではないことが理由とは断定できない。その後任として赴任したのは帝大哲学科出身の黒木千尋だった。しかしこの黒木も一年で辞任している。このことについては、赤木通弘とともに後述する。

漱石の五高における最初の人事は、山川信次郎の招聘であろう。山川は浅井栄熙の後任として、明治三〇年四月一〇日赴任した。冒頭で指摘した同年四月一六日付正岡子規宛書簡に「先日來山川を当校に招聘致す事に相成目下拙宅に寄寓致居候」と山川の招聘について報告した後、東京の学校から申し分のない待遇で招きを受けたが「学校の義理あり且校長の依頼山川へ対しての信義」などから断ることを告げたことが記されている。おそらくこれに子規が、東京の口を断ってまで熊本に居続けようとする漱石を案じた手紙を送ったのであろう。四月二三日付書簡には、子規を納得させるべく、この間の事情を詳しく説明している。それによると二九年一〇月頃、漱石が「教師をやめたいが好分別はなきや」と妻鏡子の父中根重一に相談し、中根が「外務の翻訳官」の口を依頼したという。漱石は、「翻訳官」になることへの不安を述べ、さらに子規の斡旋してきた「仙台の高等中学校」も行きたくないと述べた後、中根からも東京の「高等商業学校」に年俸千円、高等官六等で招聘があつたが断ったことを伝えている。

漱石はさらに「当校の校長は是非共居つて呉れねば困ると懇々の依頼なりし故宜しい貴公が夫程小生を信じて居るならば小生も出来る丈の事はすべし又教師として世に立つ以上は先づ当分の処御校の為に尽力すべしと明言したり」と述べ、同じ事を山川にも告げたことを伝えている。教師の職に不満を抱きながらも漱石の能力を高く評価し、信頼する校長を前に、五高赴任一年後の漱石は、初めて教師としてこの地に腰を据える覚悟をしたのではな

かったか。

この、山川招聘については、漱石だけでなく、菅虎雄の推薦もあったことと思われる。山川は漱石と同じ慶応三年（一八六七）生まれだが、一年遅れで大学予備門に入学。明治一九年に漱石が留年しているのと同じとき山川と同級になっている。漱石の現存の書簡に初めて「山川」の名前が出てくるのは、明治二二年六月五日付子規宛書簡においてである。子規の『筆まかせ』には「賢友 山川信氏」とある。予備門時代からその親交が始まったと思われるが、山川も落第し、帝国大学を卒業するのは漱石に二年遅れている。しかし、山川は漱石につぐ帝国大学文科大学英文学科卒業生であった。五高の英語教師は、黒木、山川と、まさに帝大出身の教師で固められていくような様子を呈している。なお、山川と帝国大学英文学科で同級の玉虫一郎一は、漱石の後任として二九年に松山中学校に赴任している。

四、佐久間信恭・赤木通弘・狩野亨吉

一方、英語科の主任であった佐久間信恭は校長から遠ざけられていく。五高記念館の資料の中に六月二三日起案の「佐久間非職」についての上申書が残っている。七月七日か八日に発表したもので急ぎ取りはからって欲しいとの内容である。さらに同年一月二八日には「諭旨免官上申ノ件」が文部大臣宛上申され、二月二五日には「諭旨免官」が言い渡された。翌年一月二一日、これを受けて佐久間は辞表を提出した。

かつて、この佐久間を漱石が「放逐」したのではないかという疑いが持たれていたようだ。長谷川貞一郎の「熊本時代の漱石と米山天然居士」（『漱石全集』別巻）という談話に、光琳寺町に住

んでいた漱石を佐久間と共に訪ねたことがあったというエピソードが語られているが、それを聞いた聞き手が、漱石と佐久間の確執がなかったか聞いたのだろう。「佐久間君と仲が悪かったって？そんなことは聞いていませんね」と答えている。同じく五高の同僚で佐久間と同じ東京英語学校の後輩でもあった篠本二郎は「五高時代の夏目君」（『漱石全集 月報』昭一一・一）で「善く喧嘩をする佐久間君と癪癪の強い夏目君とは、終始互に信じ、一度も忌はしき事件は起らなかった許りでなく、親交を続けて互に賞て居た^(注6)」と述べている。

佐久間が「自ら戒むると同時に他人の非を責むることも激しくして屢々人と衝突したことがある」（前掲「五高時代の夏目君」）というような直情の人であったことは、染谷昌代氏の「評伝佐久間信恭」（『学苑』二九七号 昭和女子大）にも指摘されている。染谷氏は佐久間が一年前後で職を転々としているのも「狷介人といいいれぬ性格で上司や同僚と衝突したため」と推測している。

五高を辞めた理由は分かっている。染谷氏によると、非職後上京して浄土宗本校の英語教師、東京専門学校英語科講師などをへて、明治三五年から大正三年まで一二年間東京高等師範学校講師を務め、『会話作文和英中辞林』『英語おもちゃ箱』など、多数の参考書を執筆したという。晩年の大正一一年には大阪外語大学に請われて教授となり、二〇〇〇冊もの蔵書を寄贈して大学図書館にぎわしたことが、「大阪朝日新聞」（大一一・四・二〇付）に掲載されている。佐久間は翌一二年五月一日六二歳で死去した。

この佐久間に対して漱石がどのような気持ちを抱いていたかは定かではない。現存する二通の狩野亨吉宛書簡で佐久間のために、書籍目録の借用を依頼していることがわかるのみだ。しかし、ここで漱石が「可成は友人の情誼として便宜を与へ度と存候につ

き」(傍線著者)と述べている点は注目される。佐久間の五高での授業ぶりは「高尚でわかりにく」かった(浜崎曲汀「熊本時代の夏目漱石」『文藝春秋』昭九・七)ともいわれているが、同僚であつたラフカディオ・ハーンは佐久間が文学的英語においてまれに見る知識を持ち、博覧でいい本を持っていると高く評価していた。^{注7}しかも「職員出欠調」をみても真面目な勤務ぶりである。少なくともこうした教師に対しては漱石の批判は向かなかつたのではないかと思われる。染谷氏は「官僚風の校長と衝突」して五高を辞職したと記しているが、校長の采配だつたように思われる。漱石は明治三〇年一〇月、この佐久間の後を受けて英語科主任となる。

漱石が主任になる直前に行つた人事がある。それが赤木通弘の招聘である。ちょうど漱石が、父直克死去のため、鏡子と上京したときのことである。佐久間の非職上申は前述のように六月のことであり、七月七日付で非職が言い渡された。ちょうど漱石が上京する前日のことである。佐久間非職について校長からいつ知らされたかは分らないが、上京のついでにその後任人事を任されたのだろう。狩野亨吉にその仲介を頼んだと思われる。

七月一七日付赤木通弘宛書簡によると、翌日の面会を申し込んでいるが、ここで漱石は、まだ他にも候補者がいること、決定は漱石一人ではできないこと、もし他に任官の口があるのならば断らないようにと念を押している。この人事は、二四日には決定したことが狩野亨吉に伝えられた。また、赤木には、八月五日付書簡で熊本の校長からの知らせで、すぐに教授に任官の上、官位も七等を考へていることなどを伝えている。ところがこの赤木に対して、八月一六日付書簡では、五高の教頭桜井房記から黒木千尋が辞任したため、担当していた論理の後任としても一週九時間受

け持つて欲しいと知らせが来たことを伝えている。そのため英語は多くても一〇時間くらいに減らすことを申し入れている。

書簡ではすでに英語の分担時間について了承済みであつたことが書かれており、黒木の解任は、突然だつたように見え、赤木に至急了承するよう懇請している。ただ、漱石は黒木に対してはあまりいい印象を抱いていなかったようで「黒木千尋氏の事なれば不人望の極解雇に相成候もの再度の就任は思ひもよらぬ事」(明三〇・一二・一三付狩野亨吉宛書簡)と述べている。赤木は、漱石との交渉の末に、九月から五高に就任した。しかし、三ヶ月で辞任してしまうのだ。

二月七日付狩野宛書簡で漱石は、赤木の辞任に至るいきさつを伝えている。それによると、赴任以来、本人の希望でもあつた論理の授業が、^{注8}思ひのほか生徒に評判が悪く、山川信次郎と共に赤木をサポートしてなんとか生徒の不満を抑えてきた。しかし、赤木が「小心翼翼たる人物」のため、生徒の質問にうまく答えられないことを気に病んで欠勤しがちであり、なおかつ眼病のためついに漱石に辞職の意を伝えてきたという。漱石はこれを校長に伝え、辞職の運びになったという。「職員出欠調」によると赴任した九月は欠勤が一日、一〇月は四日であるが、十一月は一日、十二月は一日の欠勤が記されている。五高記念館にはこの赤木の辞表も残っており、漱石が書簡で伝えたとおり、添えられた診断書(写)には「熊本病院在勤医学士 豊田虎之進」の名で「病名結膜炎及神経衰弱症」と記載されている。

この赤木の辞職がきっかけで、狩野亨吉の五高招聘が実現することになる。前掲狩野宛書簡で漱石は赤木が担当していた英語の一〇時間については山川信次郎と二人で分担するとしても、論理の教師がいなことを訴え、狩野の就任を依頼している。^{注9}この人

事については、漱石が校長に持ちかけたことがわかる。しかし、校長は狩野に何度か五高への赴任を請い、断られていたらしく、狩野の赴任については実現が難しいと言ったのだろう。それに對して漱石は論理の教授だけでなく、学校にそれ相応の地位を用意するよう訴えたという。これに当時教頭であった桜井房記も賛成し、桜井は工学部主事に転じ、狩野を教頭として迎えることになる。

狩野招聘について、中川浩一は前掲「熊本時代の漱石 新考」で中川がこれよりも早い五月に狩野と東京で会い、五高赴任を懇請していたことなどをあげ、漱石が狩野承諾の電報を得て校長室に走り込み、「若し大兄を呼び迎ふる以上は無限の信用を置き万事内相談の上にて共に責任は分ち進退を共にする決心なるや否や確とたしかめ候処小生の希望する如き決答を得候」（明三〇・一二・二二付狩野宛書簡）と書き送っていることに対して「学校長としての中川元の心は、当たり前すぎることを詰問にくるとは、若気の至りとはいえ、夏目も大人気なしとするものであったろう」と冷ややかに見ている。

確かに、狩野が中川校長と、第四高等学校以来のつきあいがあり、中川の再三の要請を断り切れなかったということもあったかもしれない。しかし、それ以上に狩野を動かしたのは、やはり赤木を紹介したことへの責任感と学生時代からのつきあいである漱石、山川のたつての願いでもあり、彼らがいる五高への赴任に心が動いたためといつてよいのではないだろうか。

狩野は、明治三十一年一月二日から一月二四日まで五高の教頭として論理学と倫理を担当している。青江舜二郎は『狩野亨吉の生涯』（中央公論社文庫 昭六二・九）の中で、わずか一〇ヶ月の熊本赴任では、「意欲があつたとしても実際はほとんど何も

できなかったとみななければなるまい」と述べ、熊本時代についてはわずか二ページを割いたのみである。しかし、二度と官立学校に仕官しないと云っていた狩野が、再び教職に就き、ここから一高校長として転出し、八年の長きにわたつて校長を務め、さらには、京都帝国大学文科大学学長として二年間身を置いたことを考えれば、重い腰をあげさせた漱石の功績は大きいといえるかもしれない。

五、漱石が「放逐」した教師と奥太一郎

では、漱石が「放逐」した教師は誰であったのか。既に検証したことがある。^(注10)これは、大浦肇という教師で、明治三十一年五月一日日本文部省に「諭旨免官」が上申され、一日には「諭旨免官」の辞令が出ている。これを受けて大浦肇は一二日辞職願を提出、一日付で「依願免本官」となっている。生徒からも担任を変えてほしいという要望の出た教師で、漱石は、生徒に直訴されたが、そのときは「〇〇君は高等官何等の人で総理大臣が奏請して任命され、校長が適当と認めて、君達等級を担当せられたのだから、君達の意見に依つて取換へるべき筋合のものではない」というような応答だったという。^(注11)生徒は、漱石の答えを「官僚的」と捉えたようだが、漱石が、生徒の要望を受け入れるという態度を示さなかったのは、愛媛尋常中学で起きた校長排斥運動のような動きが生徒の請願によるものなのか、漱石がその前から考えていたことなのかは、分からない。しかし、生徒達の訴えを退けてまもなく漱石は行動を起こしたことになる。

明治三〇年一月二七日付菊池謙二郎宛書簡で津山尋常中学校

に勤務していた奥太一郎について問い合わせたあとに「此事は候補者製造上にて始めて校長へ打ち明る手順につき（即ちある無能力の教師放逐を建議する積）」と、漱石は過激な発言を残している。この書簡の存在が、いかにも漱石が人事権をほしいままにしたかのように思われる要因となっている。

しかしこの人事に関する書簡の存在によつて実は、漱石が教員を選ぶ際に細心の注意を払ったことがわかり、実に興味深いものになっている。以下に詳述したい。

前掲菊池宛書簡で漱石は「来年四月頃迄」に英語教師を一人雇い入れたので、その「選定」をそろそろ始めたいと伝え、この夏に会つて話をした際、話題に上った津山尋常中学校の奥太一郎について「性行学力其他大兄の御承知の箇条委細の処」を知らせてほしいこと、また「高等学校英語教師」としての「見込み」があるかどうか、菊池自身の判断を仰ぎ、見込みがあるならば書簡で、本人の都合を尋ねるよう依頼している。奥は、赤木就任の際にも、候補にあがつていた人だ。

また、狩野に宛てても「来四月頃には当校英語教師一名是非共更迭致し度考にて目下候補を探索中」と伝え、「余裕あらば神田氏へ御面会の上只今迄検定試験及第者の内出来よき人の姓名奉職地御尋ねの上御控え置被下度猶其他にも御心当り有之ば相当の御詮議を煩はし度と存候」（明三〇・一二・二三付）と、いまだ候補者を選定中であることがわかる。神田氏とは神田乃武のことである。

この神田からの推薦も同じく奥だったのだろう。翌三十一年三月七日付奥宛書簡には「大兄の事は兼て菊池謙二郎及び神田乃武両氏より承はり候事も有之候」と述べられている。奥に月俸、地位について示しながら、これは初めてのことだが「当校英語教師主

任の資格にて小生より伺ひ上候」と、「主任」としての立場を明らかにしている点が注目される。三月一日付書簡では奥の承諾を受けて「校長の命」として四月からの赴任が伝えられたことが分かる。五高資料では三月一七日、文部省に奥太一郎の英語科嘱託の伺い書が提出されたことがわかる。

しかし、奥は翌一八日「暁三時半」ごろ「不得已事故」のため転任することができないと伝えてきた。これに対して漱石は一八日付奥宛書簡で「最後の手續」は奥の電報の到来を待つと言ったことを肯定しながら、「左りながら」と、諄々と奥を説き伏せてしまうのだ。「既に大兄をのみ宛てに」していること、今になって断られては「小生が学校に対する信用の失墜は兎角校長及び教頭の迷惑は然当の事」と「再考」を促したのである。奥はこれを受け、四月四日辞令が交付された。

奥は以後、大正三年二月まで一七年間、五高で英語教師を務めることになる。奥との交流については、興味深いことも多いが、ここでは述べない。原武哲氏は『夏目漱石 周辺人物事典』の「奥太一郎」の項目で、この奥を赤木通弘の後任としているが、それは間違いで、「放逐すべき教師」の後任である。

前述のように、この奥採用に当たつて何よりもその人柄、能力を重視し、最初から一人に絞るのではなく「可成丈多数の候補者を作り其中より選択の自由を得度」（前掲菊池謙二郎宛書簡）と、広く帝国大学時代の恩師や同窓生にあたっていること。そして「成否は無論小生にも保証し難き儀」（同、菊池宛書簡）と漱石一人で決定したわけではないことがわかる。先の、赤木通弘の場合にも「小生一存にも参り兼ね候次第のみならず決著迄は多少の御協議を要し候」と、話し合いがあることが示唆されている。それは、山川信次郎の後任探しの際にもっと明確に語られている。

六、山川信次郎の後任

山川の一高転任の話は、明治三二年三月狩野からもたらされたものようだ。一連の狩野宛書簡によると、山川は、最初は一高転任に乗り気でなく断っている。しかし、漱石の六月二〇日付狩野宛書簡には、山川本人からの相談もあり、同情した漱石が、中川校長にかけあい、五高を円満退職できるよう取りはからったことが記される。さらに狩野に一日も早い一高転任を依頼している。しかも、山川が適当な後任が見つからなければ熊本を去らないと言っているため、狩野にも人事に協力してほしい旨、訴えている。この山川の転任に対して「他人が移転すると自分も移つて見たき様な心持が一寸起り申候」（明三二・六・二〇付狩野宛書簡）とふと、弱々しい本音を見せているところに、そろそろ、漱石自身の熊本滞在の限界が近かったことを感じさせられる。

しかし、その後、なかなか山川の一高就任について話が進展しないことに不安を抱いた漱石は、狩野に宛てて、七月八日付、同九日付、と一日も早い山川の一高転任の実現を懇請する書簡を送っている。その細やかな心配りを示す書簡は、漱石の情の厚さを示すものともなっている。

山川の後任として狩野から推薦されたのは「茨木清次郎」という人物だった。漱石はここでも狩野に「同氏性行學術の点につき巨細御承知の事柄乍御面倒参考の為御報道にあづかり度」と述べ、さらに「明日英語部員集会各自に候補を出して相談する筈に有之候」（明三二・七・一二付）と、人事が漱石一人ではなく、話し合いによって決定していたらしいことがこの書簡でわかるのである。

山川の後任には、狩野から紹介を受けた人物ではなく、鎮西学

館出身で同校教師であつた遠山参良が採用された。遠山もまた奥と同様帝大出身の教師ではなかった。遠山は五高の英語教育に貢献し、明治三二年から昭和七年（一九三二）九月一〇日亡くなるまで、五高の英語教師として人生を全うした。

七、終わりに

漱石が五高において関わったと思われる人事について詳細に見てきたが、これらの人事は決して漱石の独断で行われたものではないことがわかる。無論漱石が建議して辞任させた教師がいたことは確かだが、それも後任人事は恐らく複数の候補者を立て、それを協議の上決定したのではないかと思われる。

最後にもう一人、木村邦彦の例をあげる。資料はわずかで詳細は不明だが、当時の五高の人事の様子を知ることのできる資料である。

木村邦彦は鎮西学館出身で、岐阜県尋常中学校、東京の私立生息私語学校講師を経て、明治三一年八月一九日五高に赴任した。この木村の採用については、五高記念館に「英語教員ノ件狩野教授ト協議ノ上其地ニテ取決アリタシ」という山川信次郎に宛てた電文起草書が残っている。また「八月一九日発電」として狩野に宛て「木村囑託シタ」との文書が残っている。校長が、夏休みを利用して東京に戻っていたらしい山川に、東京で狩野と相談しながら英語教員を探すように命じたものである。

これらの文書からわかるのは、人選には、帝大の人脈を駆使し、帝大出身者だけでなく、教員検定試験合格者からも候補を募っており、少なくとも学歴偏重というわけではなかったことだ。しかも英語科主任とは言え、漱石が必ずしも人事権を握っていた

わけではないということである。漱石は、しばしば書簡でも述べたように「学力」「人間性」さらには、病気や借金などがないかなど、できるかぎり問題のない教師を探そうとしていたことがわかる。それらは、学校のためというより、なによりも「学生」の学力向上ためであつたはずだ。かつて教師の質の向上が生徒の学力向上に必須であることは「中学改良策」(明二五)でも主張していた。当時の尋常中学校の教師について「何処にて修行したるや性の知れぬ者多く僅かの学士及び高等師範学校卒業生を除けば余は学識浅薄なる流浪者多し」と述べ、これらを退けるためにも「教員の資格を厳に」することを提言していた。さらに学識だけではなく、徳義の高い人物でなければ、教師としての職務の遂行は難しいとも述べている。学生時代に書かれたものではあるが、その基本的な考えは変わることはなかったといえよう。のちの「語学養成法」でも同様のことが述べられるが、漱石はそうした考えをこの五高で実践したのだとも言える。

漱石は五高で確かに人事に関わつたが、それは「校長の片棒を担ぐ」というようなものでは決してなかった。ましてや「同僚の恨み」を買うような人事ではなかった。帰朝後の漱石については、つい創作面にばかり目が行き、書簡も作品や漱石周辺に形成されつつある弟子達の動向を中心に読みがちだ。しかし、明治三六年から三九年にかけて(三九年は圧倒的に執筆作品についての言及が増えるが)、特に帝国大学の卒業式のある七月前後には、地方の中学や高等学校からの卒業生に関する問い合わせに応じたり、学生に教職を斡旋したりした書簡が数多く残っている。当時、こうした人を介した教職の斡旋はきわめて常套の手段だったということだ。

では「熊本は思ひ出してもいや」(明三九・一・六付松本源太

郎宛書簡)と、漱石が嫌悪したものは何だったのか。明治三八年一〇月二〇日付奥太一郎宛書簡に「第一高等学校は熊本より大分気楽に御座候同僚の家杯へ参りたる事無之先方よりも参りたる事無之候」とある。かつて狩野亨吉の熊本時代のノートを翻刻した^(注12)が、そこには連日、同僚が生徒をはじめとして学校の様々な問題を検討するため狩野宅を訪ねてくる様子がメモされていた。教師の仕事に没頭すればするほど、公私の区別のないほど雑務が押し寄せてくる。漱石もまたその渦の中にいた。しかし、いったん熊本を離れ、英国で自らの時間を取り戻したとき、それは苦痛な時間として想起されたのだろう。帰朝後、帝国大学でかたくななまでに「客分」としての非常勤講師の地位を固持する漱石の姿を見るとき、この五高教師としての四年三ヶ月がきわめて特別な時間であつたことを思い知らされるのである。

+本文中に使用した『漱石全集』は、注がないものはすべて平成五年(八年出版の岩波書店版による)。

注

- (1) 荒正人が『漱石研究年表』で、明治三十一年の「六月末か七月初め(日不詳)(推定)(後者は小宮豊隆推定)、早朝、鏡は自宅に近く、梅雨期でかなり水量の多い白川の井川淵に投身自殺を企てる。：後略」と書いて以来、多くの研究者がこれを踏襲するが、この年は梅雨に入ったとたん雨が少なく、空梅雨が心配されていることが新聞でわかる。しかも、五高の「職員出欠調」では、六月の漱石の欠勤は、〇であるのに対して五月は七日間で、熊本時代で最も多く、また五月には雨が多かったことから、筆者は五月と推測していた。さらに平成二一年狩野亨吉の熊本時代のメモ

を翻刻した際、「五月二十一日」に「漱石氏妻病氣を見舞」というメモを見つけ、鏡子夫人の入水自殺未遂事件は、五月二十一日ころと断定できる。詳細は拙稿「熊本時代の狩野亨吉日記」(「方位」第二十七号 平二一・一一)

(2) 五高資料「教員受持学科並二時間数報告書」によると明治三〇年一〇月 夏目金之助二〇、山川信次郎二〇、大浦肇一八、赤木通弘一〇(英)・五(論理)、篠本二郎八(英)・八(鉱物)、枝光寅太郎八(英)・九(経済通論)、ファードル二四、三一年は夏目金之助二六、山川信次郎二四、となっており赤木の英語を二人で分担していることがわかる。

(3) 田中勘三郎は「職員履歴」によると安政六年(一八五九)三月二八日会津生まれ。「明治一〇年英語学校及東京大学予備門ニテ全課卒業」とある。二八年四月五高に赴任した。履歴には明治二四年九月から二七年六月まで米国ハーバード大学等で英文学、生物学等学び二七年六月帰国したとあるが、留学以前も以後も学校を一年足らずで転々としている。

(4) 「職員出欠調」によると二月の欠勤は一四日、三月は一七日となっている。

(5) 荻村錦太の辞職願には「昨明治二十八年八月本校英語授業ヲ囑託セラレテ以来一意専心聊微力ノ及ブ限り永ク本校ノ為メ尽ス事アラント致シ居リ候処今般家事不止得事情差起リ奉職難仕ニ付キ高解職相成度此段奉願致候也 明治二十九年七月二日 荻村錦太」とある。

(6) 篠本二郎の「五高と夏目君」という談話は新版『漱石全集』別巻(平八・二)には不思議なことに未収録である。

(7) 明治二十七年一月一〇日付西田千太郎宛書簡

(8) 八月一六日付赤木通弘宛書簡に「論理御担任の事は兼ねての御

希望と存候へば」とある。

(9) 注(2)に示したように漱石が週二六時間、山川が二四時間で、赤木の担当していた一〇時間を二人で分担している。

(10) 拙稿「漱石が『放逐』した英語教師—五高資料より—」(「方位」第二十四号 平一六・三)

(11) 木部守一「私の見た漱石先生(上)」(『漱石全集』別巻 平八・二)

(12) 拙稿「熊本時代の狩野亨吉日記」(「方位」第二十七号、平二一・一一)

(13) 明治三九年二月二三日付坪井九馬三宛書簡で漱石は「英語試験委員辞退」を主張した。